

# 筆子伯母様との 想い出

わたなべひろみ  
一男・渡邊廣海氏へのインタビュー



昭和18年 兄旭氏由屈前の家族写真  
後列の学生服姿が廣海氏



区別もなく、一緒に遊んでいっしょに御菓子を作っていただきます。

【解説】 学園では生活のすべてがまかなわれる理想郷を創るという理念が体現されていました。学園の敷地は8,000坪もある広大なものでしたから、主な遊びは戶外でやりました。創作しているものは、馬・豚・羊・山・七面鳥・ウサギ、池に鯉など。都会の少年からみれば、珍しい興味あるものばかりでした。羽を広げて向かってくる七面鳥には怖い思いをしました。

クリスマスは大きなイベントでした。園児たちの賛美歌の合唱や、たどたどしい台詞まわしながら一生懸命に演じる聖劇

さんがさんさんの没後に3代目の園長になられたという点からも明らかになりますね。

【解説】 そうですね。兄も、一時、石井家の養子にはなっております。第二次世界大戦後、社会が変わりましたから、兄は昭和25年に渡邊家に戻っています。また、筆子伯母の身の回り世話をしてくれた「おとさん」、小鳥島家に筆子伯母の嫁いだときから付いていっています。「おとさん」は、母の武家社会の雰囲気を持った人でした。

【解説】 「おとさん」は映画の冒険に登場しますね。戦前・戦中戦後を御存知の廣海さんの御経緯から、学園の事業について何か御考えはございますか。

【解説】 石井亮一先生夫妻は、私利私欲をまったく捨てて、障害のある子どもたちのために一生を捧げました。学園を維持するために印刷所を経営したり、園内を流れる矢川の清流を利用して山菜を栽培したり、温室で花を栽培するなど、様々な事業を試みました。悪戦苦闘の連続でした。

そのような中で学園の支えとなったのは、とくに筆子伯母の直社友との交友関係であったと思われます。多くの皇族方からの御下賜金、御来訪を初めとして、親戚以外では東邦火災保険株式会社、三井合會社、三菱合資会社、立教高等女学校、三條公農家、一條公農家、岡部長孫子會、実業家の原邦彦、岩崎小弥太、流澤榮一、外交官の澤田廉三(実喜の夫)の各氏、筆子伯母が教鞭をとった静修女学校・華族女学校の卒業生、その他数多くの方々からの財政援助がありました。

これ將に「ノブレス・オブリージュ(noblesse oblige)」、貴族の義務を実行した当時の上流階級の人々です。筆子伯母の業績は立派なものであるが、それを助けた沢山のの方々も同様に立派で、そのお蔭で学園は110年の歴史を刻んで今日にいたっているのだと思います。

【解説】 最後に私ども人生の後輩に向けてのメッセージをお願い申し上げます。

【解説】 私は、小学校の頃から約10年、筆子伯母と接しました。当時はただ楽しく遊んでいたわけですが、今、改めて思い返してみますと、素晴らしいものを受け取っていたことに気が付きます。それは、人に対して差別をしないこと、世の中には色々な人がいることをごく自然に受け入れること、障害のある方と一口に言っても、軽重の差があり、一人一人に個性があるので、各人が面白い。そして善人です。彼らに騙されたり、ウツをつつられたり、乱暴されたりすることがありません。それを知っている私は、幸せ人間です。

【解説】 本日は心に染み渡る御話をうかがわせていただきました。誠にありがとうございます。(文責 藤貴久美子)

日時:2008年3月18日 午後1:30~3:30  
場所:社団法人 昭和会館  
聞き手:二井仁美・藤貴久美子

## 1. 男爵渡邊家について

【解説】 廣海さんは大正15年(1926)に男爵渡邊家三男としてお生まれになられたが、男爵渡邊家とはどのようなお家柄でしょうか。

【解説】 渡邊家は大村藩士の家です。幕末維新期当主であった清は、藩主大村純純をよく助けたといえます。戊辰戦争では上野戦争・会津戦争で活躍し、その功勞に対して賞金450石を支給されています。維新後、清は7年間にわたり福岡県令をつとめ、元老院議員となり、明治20年(1887)5月24日に男爵を授けられます。その後、貴族院議員・福岡県知事などをつとめました。

【解説】 華族の五爵位の制定は明治17年7月のことですから、明治20年に授爵されたというのは早い時期のことですね。

【解説】 慶応4年(1868)の戊辰戦争から考えれば20年を経ていすから、この間の功勞に対しての授爵と考えてよいと思います。

## 2. 遊びに行った学園の様子

【解説】 廣海さんの父上の汀さんは御養子で、筆子さんより22歳下という年齢差がありますが、家族ぐるみのお付き合いがあったと伺っております。

【解説】 石井家とはとても悪意にしておりました。谷保村の滝野川学園には幾度も遊びに行きました。学園行きで、私の記憶にありますのは、学習院初等科3年頃(昭和9年頃)からで、通常は省線で立川迄行き、そこから南武線に乗り換え、矢川駅で下車して、徒歩で行きました。当時、矢川駅は無人駅で、畑の真ん中に粗末なプラットホームがあるだけで、そこから桑畑に囲まれた細い道、農家ほとんど見られない道を歩いていきました。子どもは歩くのが得意になりました。時々、兄(篤氏)と一緒に国立公園で降りました。駅前には巨大な鳥籠のような檻、子ども目からは3階建ての高さの檻があり、そこに飼われている鳥を見るのも楽しみ一つでした。

そこから南西の方へ広い道を行くと、右手に国立音楽大学が林の中にあり、コーラスの声やピアノの音が聞こえました。子ども心にも素晴らしい雰囲気を感じました。約3キロメートルの道のりを遠くは感じませんでした。

【解説】 お兄様の旭さんと、幾度も泊りがけで遊びにいってしまったということですね。

【解説】 はい、学園に到着すると、もちろんまず、中風で身体の不自由な筆子伯母の寢室に御姉妹に同い、しばらく会話があり、隣室の亮一伯父の書斎にも、同様に伺いました。伯父・伯父の部屋があった建物は、昔の普通の小学校そっくりで、細長い総2階の質実剛健な造りでした。夫妻の個人的な住居として造られたものでは、多分、なかったでしょう。

別棟の園児のための宿舎・教室・遊戯室、本館の講堂・職員室、聖三一礼拝堂などは、華美ではないが立派な建物でした。遊戯室(いわゆる茶の間)は和式の大広間で、冬は数ヶ所にある火鉢を囲んで、主に女性職員が本を読んで聞かされて、カルタなどで遊ばせているのに、私たちも加わって遊びました。

【解説】 伯母様・伯父様への礼儀を払いながらも、園児と何の

や、くだけたアメリカの喜劇映画の上映、福引などを、皆で愉しみました。

筆子伯母は、それに車椅子で参加し、ニコニコうれしそうに見ておられました。いつも寝床の上にある伯母が、それとは違う暖かな雰囲気包まれている様子を見るのが、私はとても好きでした。

ときに夕食をご馳走になって遅くなりますと、自動車を呼んで矢川駅まで送ってくれましたが、2度ほどは人力車でした。忘れられない体験です。

## 3. 戦前の社会の様子

【解説】 映画やドキュメンタリーでは、筆子さんの晩年を不遇に描きすぎているとの印象を受けました。

【解説】 確かに、淋しい晩年ではなかったと思います。筆子伯母の晩年、母姉(土佐川田豊信(宮野)の嫡子、子爵伊予の長女)は、石井家に頻りに見舞いに行っています。それは母の日記に記述されています。

【解説】 渡邊家からのバックアップがあったということは、汀